

沈船を探る

—トラック諸島遠征記—

福 山 修



陸前に上空を環礁に沿つてぐるつとまわつてくれるので、地図で見るとよりもよくわかる。現在では春島がトラック諸島の首都的存在になつていて船や飛行機もそこに着くようになつているし、官庁や病院、銀行、郵便局等もその島に集まつている。しかし日本軍の統治時代は、夏島がそれであり、その証拠に他の島には全く見られないセメントでかためた道路が島を一周している。又、日本軍の残していつた建物やトーチカなどが生々しい弾痕を見せていた。

そのような地、トラック諸島に到着して、我々はまず、あらかじめ

我々が活動に際して、トラック諸島というあまり聞きなれない場所に注目した最大の理由は、環礁という特異なサンゴ礁の形態と、もう一つ、太平洋戦争中にその環礁内に沈んだといわれる多くの日本海軍の軍艦や商船の調査という、二つの大きな魅力にとりつかれたためであつた。

まず現地のトラック諸島の状況から説明すると、そこは旧日本軍の名付けた地名で、春、夏、秋、冬の四季諸島と、日、月、火、水、木、金、土の七曜諸島及びその他の小島からなつていて、そのまわりをサンゴ礁がとり囲んでいる。飛行機が着

手紙で連絡をとつておいた日系人の人達にあいさつ廻りをし、その協力を得ることが出来た。

その後、荷物はまだ到着していなかつたが、我々はモーターボートを貸りパイロットを雇つて、沈船の位置確認に向つた。

そして90艘余りの船が沈んでいるといわれる環礁内から、深さ、大きさ、ベース春島からの距離などを考え合わせて、最も手頃であると思われる4艘をピックアップした。4艘共甲板までの水深が20メートル余りであつたので、素潜りをしてみた。それは今まで潜つてきた海とは比較になら

ないほどすばらしかつた。ボートから飛び込むと同時に寄つてきたバラキユータの群には一瞬あせらされたが、しばらくして襲つてこないことがわかると安心して何回となく甲板までの素潜りをくり返した。20年以上も海底に眠り続けてきたためか、その船体にサンゴや海綿が付着して非常に美しい。まるで別世界に遊ぶ心地さえた。又、その沈船が漁礁と化しているため、そこに群がっている魚の種類は非常に多く、私が過去に見たほとんどすべての魚がいたし、その数や大きさも群を抜いていた。

私の沈船での第一印象はまずそんなところであつた。

しかし、何よりの問題は、潜水器具がまだ一つも到着していないということであつた。それでも我々は春島周辺の素潜り調査を行いつつ、潜水用具、生活用具、それに食糧などを満載し、我々の隊長である水戸氏が乗り込んでいる船の到着を待った。しかしここで我々が一番懸念していた問題が起つた。船が予定日を過ぎても到着しないのである。完全装備をもつて、晴れて沈船にアタックする日を夢みていた我々にとつて、その動揺はきわめて大きかつた。そのため、我々は船会社の代理店はもちろんの事、情報を得られそうなあらゆる場所を歩き廻つて船の情報を集めたが、代理店などでは「明日はおそらく入港するでしょう」などと、いい加減な返事だけであつた。まだ初めのうちはその言葉のある程度信じていたが、船は何日たつても入つてこなかつた。代理店で「明日は……」の言葉を何回聞いたかわからない。そのようにして日が過ぎていき、結局船が入港してきたのは、最初の予定(3月9日)より10日遅れの3月19日であつた。それでも水戸氏が元気な顔を見せ、やつと4人のメンバーが勢揃いした時は、我々にも精気がよみがえつたのであるが、その喜

びも一瞬にして消し去つてしまうような一大事が起きた。それは我々がたしかに神戸港で積み上げ、この地に到着以来、待ち続けてきた荷物の紛失したことである。テント、食糧、コンプレッサー、潜水器具が全く紛失してしまつていたのである。(その当時のごたごたはこの文のタイトルとあまり関係がないし、私自身、思い出すのも気分が悪いのでここでは省くことにする。)それでもまだ救われた事には、水戸氏のキャビンに保管しておいた潜水器具、すなわちポンベ、レギュレーター、水中カメラ、フラッシュ、水中8ミリカメラ、水中銃が我々の手に届いたことである。いまさら荷物が紛失したからという理由でおめおめ帰るわけにもいかないし、またもとより我々4人にそんな気持はなかつた。何よりもこの南の海の、環礁の、そして沈船のすばらしい魅力が我々の心を離すはずがなかつた。それに幸いにも、このへんびな島にもたつた1台ではあるがコンプレッサーがあり、それもかなり能率よくポンベに空気を圧搾することができた。しかし当面の問題は、テントや食糧がつかなかつたための生活費の増加である。

そのため我々は全員の小遣いを出し合い、活動の期間も4月7日までに切り上げ、その対策とした。それでも「地獄で仏」というべきであろうか、現地の日系人の人々はいたく我々に同情してくれ、アメリカ人の政府関係者までが船会社との交渉までしてくれるほどであつた。こういう状況の下で我々はやつと3月20日から本格的な潜水活動に入る事が出来た。活動に当つては海上を自由に動き廻ることの出来るモーターボートが必要であつたが、それも日系人の人からその持ち船を運転手付きで非常に安く、活動終了まで貸りることが出来た。

そして前にピックアップしておいた4艘のうち、まずベースキャンプから最も近い富士川丸にアタ

ツクすることにした。20日と21日は浅生氏が船会社との交渉にあたって、金子氏と私がアタックを行つた。やはり8,000tというだけあつてかなり大きく、しかも水面に浮かんでいるときの様に真すぐに沈んでいたので甲板や船腹などをかなりの面積にわたつて観ることが出来た。

そしてその別世界のように美しい光景や、どう猛な魚、あるいはかわいい熱帯魚などをパツチリとフィルムに収めた。それから我々は富士川丸の内部に足を踏み入れていつたが、なんといつても必需品の水中ライトも救命ローブもないとなつては船内の奥深くまで入つていくことは不可能であつた。それでも、我々はある程度光の届いているキャビンに入つていつた。内部は薄暗く、無気味な静けさを保ち、澄みきつた海水も錆のためか少し赤茶けて見えた。私の持つていたベロックスの水中銃が、その長さのため、キャビンの入口にひつかかつたり、細い廊下につかえたりしてなかなか進みにくかつた。

その上不運な事に水中フラッシュまでが故障したため、沈船内の写真は1枚も写すことが出来なかつた。我々としてはそれでもさらに奥へ入りたかつたが、無装備の状態では、あまりに危険であつたため、途中から引き返した。陸に上がつてから水中フラッシュを点検してみたが、故障箇所がわからなかつたため、やむを得ず沈船内部の撮影を断念してその周囲の状況だけに絞つた。そして、続いて名前はどうとうわからなかつたが、冬島周辺の2艘にアタックした。まず初めに、北側の沈船で4艘のうちでは最も小さいと思われる1,500tの船にもぐつたが、これは富士川丸と異なつて横倒しになつていた。ここではサンゴなどの発達したものがあまり見られず、美しさにおいては、富士川丸より大分見劣りがした。しかしかえつて私にはこの錆ついた船の方が、20余年間も海底

に眠り続けてきた沈船という感じがした。それに魚礁という点においてはこの船の方が、富士川丸に較べて魚の量においても種類においても優つていた。しかし、この時が、4人で沈船にアタックした最初で最後の日であつた。それというのもこの隊の副長である浅生氏が、この2日後、3月24日に滞在ビザなどの関係で帰国せねばならなかつたからである。そのため、これより後の活動は3人でということになつたのであるが、隊長である水戸氏が潜水に関しては素人であつたため、潜水活動の間だけは、やむを得ずモーターボートの上で我々の補佐にあたつてもらつた。

そしてつぎの船は、冬島周辺に位置するもう1艘の沈船で、これはこの前の船の反対側つまり南側に位置した。まず潜つてみて私が感じたことは前の2艘とはかなり様子が違つていたということである。船は半壊してその後部がなく、前部から腹部にかけてどうやら原型をとどめているだけであつた。富士川丸のようなサンゴなどの美しさは全くなく、冬島北方の沈船と較べてもあらゆる面で見劣りがした。それに魚が殆んど見当たらなかつたせいも、不思議なほどの無気味さが感じられた。船の中央にびつくりするほど大きな、うす気味の悪い「ふぐ」が、まつたく動かずにじつと我々を見つめていたのも、さらに一層その無気味さを増した。

そのためと、その船に魅力がなかつたのと両方の理由で、そこには二度と潜らなかつた。そして最後にベースキャンプのある春島から最も遠い、水曜島のすぐ東にある、花川丸という沈船に潜つた。この船は富士川丸と同じような沈みかたをしていて、感じもかなり富士川丸に似ていた。ただかなりの数のタイの群がこの船に住みついていて、その群にぐるつと取り囲まれるような場面もあつたが、その時に限つて水中銃をもつておらず、写真

を撮るだけに終った。こうして最初にビックアップした4艘の沈船をことごとく調査し、その後も富士川丸を中心に潜水を行つたが、今まで以上の成果はなかつた。

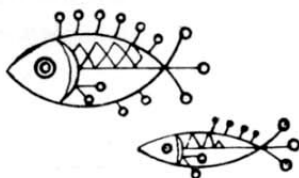
このようにして、今活動の最大の目的である沈船調査を終えたわけであるが、器具の不足で沈船内部を調査出来なかつたことがなんといつても心残りであつた。

それでもこの悪い条件のもとで、とりあえず活動を行なえたということで、私としては満足感をもち

つことが出来た。

この沈船調査の他に、サンゴや外リーフの海底状況の調査、トラック諸島の調査などを行つたわけであるが、それらを全て終えたのが4月4日。そして記録の整理などを済ませて現地の人たちの熱狂的な見送りを受けながら我々がこの島、トラック諸島をあとにしたのは、日本ではそろそろ桜も満開という頃、4月7日のことであつた。

(経済学部3回生)



レジスターペーパー
計算機用巻紙
硬貨巻
その他紙加工

東大阪市永和3丁目77番地
(株) 平元商会
TEL 大阪(722)代 1656

東京営業所
東京都渋谷区山下町2番地
TEL 白金(444)代1551
福岡営業所
福岡市中浜口町14番地
TEL 福岡(29)6881
長岡工場
長岡市寿2丁目2番8号
TEL 長岡(4)5218